

二〇二三年度 大妻中野中学校

第四回アドバンスト入試  
第二回グローバル入試

二月三日午前 問題用紙

# 国語

座 席 番 号			
			番

受 験 番 号			
			番
			氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で12ページあります。
  - (二) 試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
  - (三) 問題用紙と解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
  - (四) 座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
  - (五) 試験時間は五十分です。
  - (六) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- この試験は百点満点です。

〔一〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

英語と日本語のちがひ

英語では第一人称単数の I (アイ) を用いないで自分の考えていることを書くことは困難であるけれども、日本語ならそんなことは朝飯前である。現にこの文章でも、これまでのところに一度も「私」を使っていないはずだ。\*書き出しの「用があったから出版社へ訪ねていったが……」のパラグラフはもちろん、次のパラグラフもまたその次も、英語ならアイを使わずには通れないところである。日本語でも、私かぼくを使ったほうがいいと思う人があるが、なんとなくないほうに落ち着くように感じる人もすくなくない。①日本語の第一人称は不安定で、私、ぼく、わ(た)し、おれ、小生、手前、わが輩などいろいろな言い方のあることが第一人称が動揺している何よりの証拠である。

第一人称は使わなくてすむが、②「であろう」という表現は使わないと不便である。どういうときに使うのか、と違って手もとの国語辞書に当たってみたが、ろくに説明もない。ひと筋なわではゆかないと見える。たいして意味もなく、である、でもよいところで使うこともある。というのも、日本語の文末語尾は単調になりやすい。同じ動詞、助動詞が続くことがすくなくないから、語尾に変化をつけたほうがよいと思うときに、「であろう」を用いることになるのである。だいたい、日本人には動詞の時制(テンス)の觀念がゆるやかだから、「である」なら現在形、「であろう」は推量の未来などと律儀に区別することもない。古池や蛙飛び込む水の音。この動詞「飛び込む」の時制は何だ。過去か現在進行形か、はたまた現在完了形かなどと頭を使うのはすこし変人の部類に属するであろう。そんなことはおのずからわかるはずだとされている。③それよりも形を整える必要がある。

「である」という標準的述部動詞はどうもすこし大げさに感じられる。演説口調を思わせる。自信のない政治家が「…であるのである」と叫ぶのを聞くと滑稽で吹きだしたくなる。さすがにこのごろでは、「であるのである」は姿を消したけれども、まだ「のである」はかなり有力なものとして残っている。われわれはどうもこういう断定型に抵抗を感じるらしい。同じことならもうすこしソフトな言い方を求める。そこで、「であろう」の出番となる。

中学生のとき、学校で弁論大会があつて、各学年の選手が舌鋒を競つたが、別にこれといった感想をもたないでいたところ、あとで一年上のクラスにいた人が、誰その話はよかつたけれども、「…だ」「…である」と決めつけ口調で言ったのは生意気だ。自分の意見なら、「…だと思う」とか、「ではあるまいか」とか、「であろう」と言うべきだった、とコメントを加えているのを聞いて、なるほどそんなものかと思つたから、四十年経つたいまでも忘れずにいる。片田舎の中学生にもそれくらいのはわかつていたのである。強い断定が自信を示すのに止まらず、相手に不快な感じを与えることをこのときはじめて知つた。

数学や幾何の教科書なら、三角形の内角の④和は一八〇度なり、 $A \parallel B$ で $B \parallel C$ ならば、 $A \parallel C$ である、でおかしくはない。これを、「であろう」

などとしたら滑稽である。ところが、日常の言葉づかいではA||Cであるといった明快な断定をあまり喜ばないのが日本語であって、何かすこし緩衝装置がほしい。ぼかしたほうが味わいもあるし、相手への響きもよろしい。「であろう」は、そういうときの\*シヨック・アブソーパーになる。

言い切る動詞の語尾がどうも強すぎるといふ感じがあるところから、手紙などで比較的近代まで使われていた候文が愛用される。いまでも、候文で書くと思いのほか、手紙が書きやすいということを使う人がいるが、これは文末語尾を候で包んでやると、安心して思ったことが言えるということかもしれない。敬語ではないが、⑤動詞のもつ勢いを殺して相手にやわらかく伝わる工夫をした候文には何とも言えない滋味がある。

### 直言すること

相手はばからず、思ったことを直言するのを英語で「スピードをスピードと呼ぶ」と言う。あからさまに、ありのままをズバリと言つてのけることで、さすがに勇気を要する。だからこそこういう決まり文句ができる。このごろの日本語の流行に「ズバリ言つて」というのがある。スピードをスピードと呼ぶとはすこし違つてはいるが、言にくいことをあつさり言つてしまふ、あるいはまわりくどいことを抜きにしたAな表現の方法が刺激的なのであろう、若い人たちのあいだでことに好評である。これがつよい印象を与えるのは、日本語がこれまで身につけていたヴェールをはいでしまおうとするためのショックがあるからで、われわれは言いたいこともあまりあらわに人前に見せないで、七色のヴェールをかけるべきものと思つてきた。

そういう言葉を急にまっ裸にすれば相手がびっくりするにきまつている。それがおもしろいという人が「ズバリ言つて……」というような言葉を使うかどうかは別として、そういうあらわな効果をもつた表現をする。そういう人は概して大声で話す。ところが、その一方では、妙に小声で話す若い人がふえているからおもしろい。露骨な表現におそれをなしているのか。相手の言葉が強烈であるから、身を護るために、⑥自分の口にマフラをつけているのかもしれない。

相手の目を見てものを言えと言ふ。そんなことが普通の日本人にはできるわけがない。しようと思えばたいへんな努力と修練がいる。たいていは伏目勝ちで、相手が正視していれば、ちよつと見ると悪いことをした人間が取調べを受けているみたいになる。もちろんやましいことがなくてもそうである。人中で自分の名前、あるいは、それに近い名前が呼ばれるのを聞くと、ハツとする。ときには、どうしよう、という気持になる。どういふものか、こういう癖はなかなか抜けない。小学校で先生から名前を呼ばれたときに軽い戦慄を覚えた。それがいまもつて消えないらしい。名前を呼ばれることはうれしくない。そのかわりこちらも、ぼくだの、私だのと押しつけがましいことは申しません。なるべく、⑦隣は何をする人ぞの式に生きて行きたいものですね、と思う。

ある学者が、電話をかけるとき、「こちらは〇〇です」ではどうもまざい、「こちらは〇〇ですが」とすると落ち着くと書いていた。言い切ると語尾が相手に突き刺さるような感じがするから語尾を「が」で丸めておくのである。つまり、自分の言葉に差らいをもつということになる。照れる。それで言葉尻を呑みこんでぼかす。断言は避ける。やはり相手の目を見据えてものを言える神経とは別種である。

相手を指す第二人称単数もそのことを裏付けている。「あなた」というのは向うの方という意味であって、目の前にいる人を指すのには、はなはだどうかと思われるが、直接に指示しないところから尊敬の心が伝わる。スピードをスピードと呼ばないで、目の前の人を向うにいる人のように言いあらわすのを美しいと感じる。「お前」にしても、相手の御前ということだから、やはり、相手を外した言い方であるには変りがない。なるべく直接に触れない表現をすることが望ましいとされているのだから、話し合っている人と人との目が合ったりしないのは不思議でも何でもない。あまりじろじろ見られては気味が悪いと思う。

わかりやすい表現が好まれるのは当り前のように考える人があるかもしれないが、必ずしもそうではない。だいたい新しくものを読む人間が急にふえると明晰な文章が歓迎される。明快な表現を喜ぶのはいくらか素朴な読者だからである。相手への配慮が細かくなるにつれて言い方はあいまいになるものようである。

あいまいな言い方では受け手に意味がよく伝わらない心配はある。誤解されては困るから誤解のない程度にはつきりしたことを言わなくてはと思うのは誰しも同じである。だからと言って、聞き手の気持ちを悪くさせるような露骨な言葉はいっそうまずい。どちらかと言えば、誤解のおそれはあっても、相手の気持ちを傷つけるよりはましである。それで、婉曲語法が発達する。その結果がしばしばあいまいになっても、それを顧みる暇もないのが普通である。その中では「であろう」はもつとも小さな緩衝方法にすぎない。それに相当する語法のない言語へこれを訳そうと思えば途方にくれるのは当然であるが、無理して訳そうとするには及ばないとも言うことができる。なぜかと言えば、それは日本人同士が言葉を交わすときには必要なクッションであるが、外国人の読む外国語にするときには、むしろ取り除いたほうが妙に気をまわさせないでいいからである。

日本語のあいまいさは独特の味わいのものだけでも、それは日本語の内づらである。⑧外づらではそれを捨てたほうがよいということに、翻訳者たちが気づいていないから、\*ははじめのイギリスの物理学者のような歎きになる。

### 自己否定的なニュアンス

論文の最後へきて、「しかし、この考え自体が根底から誤っているかもしれない」というような書き方をする人間が、われわれのあいだに決していないとは言えないが、アメリカ人あたりから見ると何とも割り切れない感を持つらしい。それくらいならはじめから論文を書かないやいい、書いた以上は無言を言わず相手に認めさせる、決して自分が誤っているなどということは言っていないのだ。ある人がそういった。

早い話が、交通事故を起こしたとき、たとえ自分の側に非があっても、まず第一声は君の責任だ、君が悪いのだ、でない、あとあとで損をするという考えが徹底しているアメリカでは、めったなことでは「すみませんでした」などとは言わない、ともこの人は言った。これはわが国でもこのごろだいぶ⑨感染してきたらしく、よくそういう例にぶつかると、見ていて浅ましいと思う。競争のはげしい社会では、それでなくては生きて行かない、などとまことしやかに解説する人を見るに浅ましい。もうすこしおだやかに生きられないものか。

論文の終りに、自己否定と見える文言をつけ加えたからとて、別にほんとうに自説がだめだと思っているわけではない。ただ、そういう控え目な

姿勢を示しておくほうが、読む人の抵抗もすくなくなり、論文が一種の敬語的表現の性格をおびることを本能的に知っているのである。つよい断定はしばしば反撥を招いて説得力を弱めてしまうから、逆に、表現を殺すような内輪な言葉が有効になる。ただ、国内でのコミュニケーションには、こういう書き方がよくても、外国向けにするときには、この部分は取り除いてやる必要がある。バカ正直に原文通りに訳さないといけないといううな考えはもうそろそろ卒業にすべきで、翻訳は **B** である。着物の一枚や二枚、着たり脱いだりしなくてはならないのは当然であろう。⑩日本語はすこし厚着になれているから、外国へ行くときにはすこし薄着にしたほうがよい。外国語には逆に薄着の部分があるから、邦訳では新しい着物を着せたほうが自然になることがすくなくない。

ゴルフのボールを打つのに、素人の目からすると、どうしてあんなにいろいろなクラブがいるのか理解に苦しむ。しかし、ゴルフアールにとつてみれば、だてに重いゴルフバッグをかついでいるわけではない。どれもこれもそれぞれに違った使い道があるからこそ持っているのだと言うだろう。グリーンにのつたボールをドライバーでたたく人はないだろうし、ティーショットにパターを使う間抜けもない。

日本語はことにグリーン上のボールの処理にやかましいように思われる。それで、至近距離へボールをころがすための道具立てが細かく分れている。乱暴な打ち方が嫌われて、なるべくソフトにソフトにボールを穴へ入れようとする。「である」と決めつけないで、そつと「であろう」とぼかすのがたしなみになる。普通のゴルフにはないような微妙な打ち方のできるクラブが日本語にはいくつも揃っている。そういう言葉のニュアンスをパターくらいしかない言葉へそのまま移そうとすれば絶望するにきまつている。「であろう」がうまく英訳できないという告白の生れるゆえんである。

われわれはお互いに遠慮しいしい言葉を交わしている。歯に衣を着せないでものを言うのは、スピードをスピードと呼ぶ以上に相手を見無視した挑戦になる。たいていは、歯にも言葉にも衣をたくさん着せてものを言っているから、言葉に敏感で、また、言葉にこだわる。ちよつとした言い方ひとつでも深く心を傷つけられたりする。こういう民族では、いわば言葉のスポーツのような演劇がうまく育たないのも不思議ではない。演劇の言葉は普通の日本語よりもうすこし歯に衣を着せない言葉であることが望ましい。

そのかわり、他人の言葉のボールが飛んでこない安全なところに立っていて、静かに独りものを思い、その思いをめぐって独自の言葉をつむぐのには長じている。言葉には情緒がべつとりつきまつているから、思ったことを正確に言おうとしても、つい余情にからまれて、先が見えなくなつてしまう。本当の知的散文が生れにくいのも言葉が着ぶくれしているためである。急に脱がせれば風邪をひくし、その言葉を受ける相手もびつくりする。当分は言葉の勢いをそぐ婉曲語法とつき合つてゆかなくてはなるまい。人間の言語感覚は服装の流行のようにさつさと新しくなるものではないからである。

〔注〕 \*1 「書き出しの「用があったから出版社へ訪ねていったが……」のパラグラフ」…これより前の文章に書かれていることを指している。

\*2 舌鋒…議論・弁舌などの鋭さを鋒ほこにたとえていう語。鋭い弁舌。激しい弁論の調子。

\*3 ショック・アブソバー…衝撃をやわらげるもの。

\*4 婉曲…表現のしかたが遠回りで、穏やかなさま。

\*5 「はじめのイギリスの物理学者のような歎き」…これより前の文章で、日本語の表現を英語に翻訳することができないという趣旨の話が書かれている。

\*6 反撥…「反発」に同じ。

問一 ———— 部①「日本語の第一人称は不安定で、私、ぼく、わ(た)し、おれ、小生、手前、わが輩などいろいろな言い方がある」とありますが、

この ———— 部以外の第一人称を二つ答えなさい。

問二 ———— 部②『「であろう」という表現は使わないと不便である」とありますが、それはなぜですか。理由を説明したものとして適切なものを

次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア. 日本語の文末は単調になりやすいため、語尾に変化をつけたいときに「であろう」という表現を好んで用いるから。

イ. 「である」という表現で物事を断定するのは責任をとまなう行為であるため、学生のうちは避けた方が無難であるから。

ウ. 日本語は時の表し方に厳密であるため、未来を推量するときに「であろう」という表現を欠かすことはできないから。

エ. 「である」という言い方は本来演説用の表現であり、一般人が日常生活で用いると大きさに聞こえてしまうから。

オ. 日本人は強い断定の表現に抵抗を感じやすく、状況によっては聞き手に不快な印象を与えてしまうことがあるから。

問三 ———— 部③「それよりも形を整える必要がある」とは具体的にはどういうことですか。次の説明の空欄【 1 】【 2 】に入れるのにふさわしい言葉を指定された文字数で答えなさい。

・用いる動詞の【 1 (二文字) 】にこだわるよりも、俳句の【 2 (三文字) 】を重視すべきだと言うこと。

問四 —— 部④「和」と同じ意味を含む熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 調和      イ. 温和      ウ. 総和      エ. 和風      オ. 和氣

問五 —— 部⑤「動詞のもつ」の「滋味がある」とほぼ同じことを述べている一文をこれより前の文から抜き出し、その初めの五字を答えなさい。

問六 文中の空欄 **A** に入れるのにふさわしい四字熟語を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 有言実行      イ. 単刀直入      ウ. 急転直下      エ. 神出鬼没      オ. 起死回生

問七 —— 部⑥「自分の口にマフラーをつけている」とは、どのようなことを例えていますか。「( )」に続くように八字以内で答えなさい。

問八 —— 部⑦「隣は何をする人ぞの式」とありますが、これはどういった態度を例えたものですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 他の人から強く関心を持ってもらうこと  
イ. 他の人と深く関わりを持たないこと  
ウ. 他の人から何かと手助けしてもらおうこと  
エ. 他の人とはまったく口をきかないこと

問九 —— 部⑧「外づら」とありますが、「( )」では筆者はどのような意味で用いていますか。「( )」に続くように十二字以内で説明しなさい。

問十 —— 部⑨「感染」とありますが、筆者はどのような意味を込めてこの言葉を用いていると考えられますか。「( )」という意味「( )」に続くように十五字以内で説明しなさい。

問十一 文中の空欄 **B** に入れるのに最もふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 世界を彩る言語の魔法
- イ. 相手を思う配慮の洋服
- ウ. 文化を作る人間の知恵
- エ. 国境を越える言葉の旅
- オ. 言語を上回る感覚の力

問十二 ————部⑩「日本語は（ ）すこし薄着にしたほうがよい」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。

「厚着」「薄着」が表す具体的な内容をあきらかにした上で、**五十字以上六十字以内**で説明しなさい。

問十三 本文の内容と一致しているものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日本語では、第一人称を用いることによって、初めて自分の心の内をはつきりと説明できるようになっている。
- イ. 英語を母国語とする人々は、相手に遠慮することなく自分の思いを率直に伝える習慣を身につけている。
- ウ. 日本人なら誰しもが相手の目を見ながら自分の心の内に思っていることをズバリと言うことができずにいる。
- エ. アメリカ人は、何があったとしても自分の非は決して認めることなく、謝罪の言葉を口にすることはない。
- オ. 日本人は、心で静かに思ったことを独自の言葉で言い表すことが得意であるため、和歌や俳句などの文化が発展した。



二 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

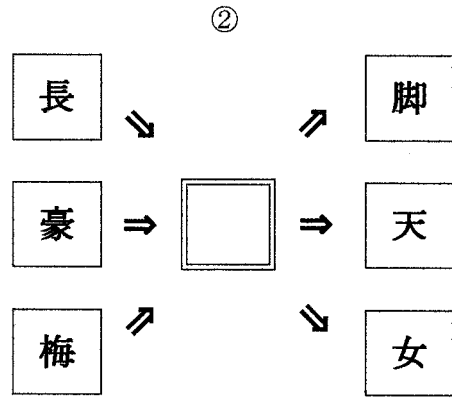
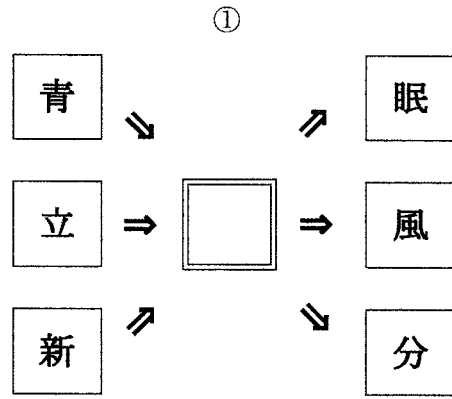
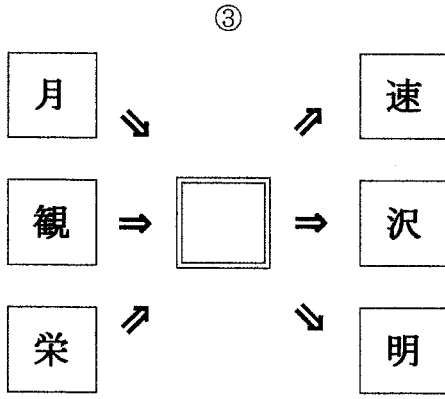
問一 — 部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- ① フンパツして高価なアクセサリーを購入した。
- ② 教会はとももシンセイな場所です。
- ③ あの選手は誰よりもジキユウ力がある。
- ④ 野生動物は危険をいち早くサツチする。
- ⑤ 文章のテイサイを整える。

問二 — 部の漢字の読み方をそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 個人の判断に委ねる。
- ② 厳かな雰囲気の中、式は挙行された。
- ③ 褒美として金品を所望する。
- ④ この植物には解毒作用がある。
- ⑤ 長年の願いが成就した。

問三 矢印の方向に読むと二字熟語ができるように、①～③の中央のマスにそれぞれ漢字をあてはめて答えなさい。



B ことわざ・慣用句に関する問題

問四 次①～④のことわざ・慣用句と同じような意味になるものを、あとの選択肢ア～コの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① のれんに腕押し
- ② 馬の耳に念仏
- ③ 二兎を追う者は一兎も得ず
- ④ 弘法こうぼうにも筆の誤り

【選択肢】

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| ア. 河童の川流れ                                   | イ. 虻蜂 <small>あぶはち</small> 取らず    |
| ウ. 玉 <small>たま</small> に瑕 <small>きず</small> | エ. 煮ても焼いても食えない                   |
| オ. 糠 <small>ぬか</small> に釘                   | カ. 木を見て森を見ず                      |
| キ. 猫 <small>ねこ</small> に小判                  | ク. 飼い犬 <small>いぬ</small> に手をかまれる |
| ケ. 知らぬが仏                                    | コ. 頭隠して尻隠さず                      |

C 言葉づかい・文法に関する問題

問五 次の中野さんと高田さんの会話を読み、あとの①～③の問いに答えなさい。

中野「昨日、テレビで怪談特集をやっていて、ついつい最後まで視てしまったの」

高田「ああ、あれ怖かったね。私は怖くて、途中で視るのをやめてしまったよ」

中野「最後の話が特に怖くて……。昨日はあまり眠れなかったの……」

高田「それはそれは……。よほど怖かったんだね」

中野「それでね、その話のはじめに『草木も眠る丑三つ時』って言っていたのだけど、どういう意味か知ってる？」

高田「ああ、それは時間のことだね。昔は時間を十二支で表していたんだよ。十二支は知っているよね？」

中野「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥でしょ！」

高田「そうそう、昔は24時間を2時間ずつに分けて、十二支をあてはめていたんだよ」

高田「例えば、午前0時を中心とする2時間、つまり午後11時から午前1時までを、子の刻と呼んだんだ」

中野「じゃあ丑は子の次だから……」

高田「**1** までを指すね」

中野「うわあ、真夜中ってわけだ。確かに幽霊が出てもおかしくない時間帯だね」

中野「あれ、でも『三つ』はどういう意味なの？」

高田「これは一刻を四等分して言っているんだ。丑の刻を四等分して、その三つ目に当たる時間帯だから……」

中野「**2** ってことだね！」

高田「その通り。草木も寝静まる丑三つ時は、幽霊や魔物があらわれる不吉な時間と考えていたんだね」

中野「私、絶対にその時間は外を歩かないようにする……」

高田「ちなみにお昼の12時はどの干支になるか分かる？」

中野「えーっと、2時間ずつだから……。  の刻だね！」

高田「そうそう、それでお昼の12時ちようどのことを **3** っていうんだよ」

- ① **1** にあてはまる時間帯を解答欄にあわせて答えなさい。
- ② **2** にあてはまる時間帯を解答欄にあわせて答えなさい。
- ③ **3** にあてはまる漢字二字の言葉を答えなさい。

問題は以上です







